

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
41	川崎市立南菅中学校	野島 隆行

学校教育目標	今年度の重点目標
知・徳・体・意の調和のとれた、人間性豊かな生徒を育成するために 1 正しい判断力を身につけ、自ら学ぶ意欲を持つ人 2 礼儀正しく、思いやりのある人 3 健全な心身を持ち、勤労を愛する人 4 責任と忍耐力のある人	支援教育を軸とした教育活動の展開(生徒に丁寧に寄り添い、一人ひとりを大切にする。) ①確かな学力の定着と主体的に活動できる教育の推進 ②思いやりのある豊かな心を育てる教育の推進 ③健やかな心身を育てる健康・安全教育の推進 ④様々な出会いを大切に、共に学ぼうとする力を育てる教育の推進

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策	
①1	一人ひとりがわかる授業、主体的・対話的に取り組む授業の実践	川崎市学習状況調査結果を教科ごとに分析し、指導の改善を図ったり、全教科、領域の授業研究会を行い、総合教育センター指導主事の研修を受けた。	学校教育アンケートでは授業がわかりやすいと評価する生徒は約90%であった。しかし、考えをまとめたり発表したりする力がついていると評価した生徒は約70%なので、そうした力を伸ばす授業の工夫が必要である。	生徒が主体的に活動したり、互いの意見を交流させる授業展開の工夫やそうした活動をクロムブックを活用し、より効果的に行う。また、OJTでの授業研究の実施や評価を指導に生かすために講師を招いての研修を行う。
①2	授業のユニバーサルデザイン(UD)化の推進	年度当初のCOによる支援の研修で授業のUD化について研修し、校内授業研究会ではUD化を意識した授業を公開し、指導主事の指導を受けた。	教室の環境はUD化の視点に基づいて整備されてきた。授業については開始時の課題や学習の流れの提示を確実にしたり、使いやすいワークシートを作成していく必要がある。	時間ごとの適切な課題を必ず提示したり、見やすい板書や記入しやすく、学習の経過が振り返りやすいワークシートの作成などに取り組む。
①3	支援が必要な生徒の状況に合わせた学習支援体制の整備・運用	時間割の中に入り込みの教員や取り出しや不登校生に対応する教員を位置付け、多様な支援体制を構築、組織的に運用できた。また学習室の整備を進め、必要な生徒が必要な時に利用できるよう運用した。	配置された教員が授業時の困り感を見取り、それを基に支援の必要性の有無や適切な支援方法を決められた。しかし支援の必要な生徒やその保護者には支援を受けることに消極的なケースもある。	生徒本人や家庭に対して取り出しの学習や不登校生徒の別室学習等、校内支援体制についての理解を深めていただくように、いろいろな場で周知を進めていく。
①4	生徒が主体的に活動する特別活動の推進	コロナ感染防止の制限がなくなり、様々な行事や生徒会活動を計画通りに実施できた。体育祭や合唱コンクール、生徒集会など、生徒が自分たちで練習計画や企画を立てて、実行することができた。	学年や学校の行事、生徒会活動において同級生や先輩後輩の間に関わり合いながら生徒は意欲的に活動ができ、生徒の成長に有益だった。ところが教育目標の達成度についてのアンケートでは教員や保護者の評価に比べ、生徒の自己評価がそれほど高くないことから、上記活動等を通して自己肯定感を高めることが課題である。	生徒が主体的に企画や運営を通して、活動に参加する場面を増やし、活動を成功させることで達成感や満足感を味わい、それによって自分に自信を持ち、自己肯定感を高めさせたい。また、そうした生徒の活動に教員が適切な評価をすることで生徒の次の活動に向けての励みとなるようにしたい。
②1	人権尊重教育の推進	外部機関に依頼し全学年対象に「性の多様性プログラム」講演会や1年生対象「人権オンブズパーソン教室」、3年生対象「認知症」講演会を開催、教職員対象に「いじめ防止」や「性の多様性」についての研修を行った。	学校教育アンケートで自分が「他人のよさを認め、優しく接したり、協力したりすることができる」とした生徒は90%超で人権を大切にする意識は醸成されてきている。しかし、未だ相手の気持ちを察せないことから生じるトラブルも発生するのでさらに学校全体で相手を思いやる気持ちを育成することが必要である。	生徒と生徒、教員と生徒の間で温かい人間関係を築くことを意識して日常的な関わり方を指導する。また生徒、教員共に次年度も研修を行い、多様性への寛容や個性の尊重等、人権に対する意識の向上を図る。

②②	生徒の困り感の早期発見と解決、相談支援体制の効果的運用	日常的な生徒観察、複数回の教育相談アンケート、いじめ早期発見チェックシートや教育相談、三者面談の実施、学年主任、コーディネーター、養護教諭等全教員、スクールカウンセラーとの複数の相談窓口の生徒への周知を行った。気になる生徒の情報は定期的に支援会議や職員会議で全体での共有や対応の検討を行った。年6回共生*共育プログラムを実施した。	アンケート結果より昨年度からの相談しやすい環境づくりへの取り組みによって上がった割合と同じく今年度も65%の生徒が教員に気軽に相談できている。さらに自分の困り感を躊躇なく相談できる生徒を増やすことが課題となる。共生*共育プログラムのエクササイズは学級の人間関係の円滑化に有益だった。効果測定の結果を学年で見取り、対応することが必要である。	引続き相談体制を活用し、生徒が教員に安心して相談できるよう生徒との信頼関係を構築しながら困り感の早期発見、対応に努める。また、相談体制について生徒、保護者に周知し、気軽に活用できるようにする。共生*共育について研修を行い、効果測定の結果の見取り方を学び、学級集団の関係性の向上や個人の状態把握と対応を進める。
③①	生徒への健康・安全教育の推進	生徒への健康・安全教育として、全学年対象熱中症予防講演会、2年生対象薬物乱用防止教室、3年生対象性教育講演会、1年生対象情報モラル教育、地域防災スクールを実施した。保健だよりを定期的に発行した。また防災訓練を2度実施した。	各講演後、生徒はいろいろな気付きがあり、自分自身の心身を大切にしようとする意識が高まっている。保健だよりによって保健、健康について生徒に啓蒙できた。また防災訓練に対しても生徒は真摯に取り組む様子が見られた。SNSに関わるトラブルやスマホ依存による問題など、根本的な解決が難しい課題がある。	生徒が自他ともに心身を大切にすることを意識するために、健康・安全に関わる特設授業の実施や外部講師等を招聘しての研修や講演を継続する。防災訓練の内容を検討し、どのようなタイミングで災害が発生しても自分の命を守る行動が適切にとれるようになるための訓練の形を検討していく。
③②	生徒の安全を守るための教職員の知識・技能の向上	教職員の救命救急法研修を実施し、緊急時の適切な対応を学んだ。学校保健委員会を開催し、生徒の健康面について校医からの知見を伺った。	緊急時の対応法について心肺蘇生や応急処置等の具体的な技術の訓練をすることができた。	緊急対応が必要になった時にはだれでも適切な対応ができるよう、毎年の研修を継続し、個人個人の知識と技能の向上を図っていく。
④①	キャリア在り方生き方教育の推進	1年生のSDGsをテーマとした野外調理活動、2年生の地域社会への奉仕的な活動や職場体験学習、3年生の進路学習等、キャリア在り方生き方教育を実践した。	活動後の感想などから、生徒は様々な新しい気付きを得たり、地域や社会、世界に対する関心を高めている。また将来の生き方について考えるきっかけになっている。上記の学びが一時のもので終わらず、学びを深めていくよう3年間を見通した学習計画を充実させることが課題となる。	3年間を見通し、段階的・発展的に学びを深めることができるよう、学習内容を見直し、生徒の状況等に応じて全体計画をより良いものにしていく。また、学習内容、取り組みの様子、成果等を保護者にも積極的に伝え、家庭と協力して生徒が夢や希望をもって将来の生き方を考えるよう働きかけをしていく。
④②	家庭・地域への情報発信	学校だより、学年だより、学級だよりの発行やミマモルメによる家庭連絡を行った。また、年2回の学校公開週間を定め、参観により学校の様子を見てもらうようにした。	各種たよりによって生徒の活動の様子などは発信しているが、保護者のもとに届かないこともある。また、開かれた学校として発信する情報について、家庭と学校で共有すべき内容を検討することが必要である。	学校の様子や教育活動の方針などをもっと保護者や地域に理解していただくため、ホームページの充実や発信内容の見直しなどに取り組んでいく。学校公開週間の設定を継続し、日常の学校の様子を気軽に参観していただく。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
<ul style="list-style-type: none"> ○生徒たちの学校目標達成度が保護者や教員より低めなので、生徒に自信を持たせるような諸活動を行うとよい。 ○南菅中の生徒には悪いところが見当たらないが、問題が表面に出てこないこともあるので、そこは心配なところになる。 ○学年以外の先生方も生徒をよく見ており、学校全体で生徒をバックアップする感じがして安心である。 ○学校の方針や考えていることなどは学校だより等に書かれているが、紙媒体ではその情報が届きにくいので、メールやホームページを活用すれば保護者の学校理解につながる。 ○学校が進みたい方向、考えていること、重点的に取り組んでいること、困っていることなどを発信し、保護者と共に改革を進めていく学校運営を望む。 	<p>今年度も学校教育方針として「支援教育を軸とした教育活動」に重点を置き、一人ひとりの生徒に誠実に、丁寧に寄り添うことを心がけてきた。</p> <p>様々な教育的ニーズのある生徒に対して、学習面については二人教科担任制の授業を設け、授業中の躓きがないよう個別に支援を行ったり、学習室を教室とは別の生徒の居場所として整備運用し、学習支援や登校支援を行ってきた。また小規模な学校の利点を生かし、学年に関わらず、全校生徒を全教職員で見守り、支援する体制を整えている。そうした中で、授業が支援教育の基本となる「だれにでもわかりやすい授業」であると評価している生徒が多いことは成果と捉えている。しかし、考えをまとめ、表現することについての評価は低めであることから、GIGA端末も活用しながら思考力・判断力・表現力を養う授業について研修していく。</p> <p>また学習面も含め、様々な悩みがある時は気軽に教員に相談できる体制を整えてきた結果、相談できる生徒の割合は増えてきた。しかし相談できない生徒の割合も一定数あることや内面にあるSOSを見逃してはけないことから、教員と生徒の関わりを大切に、何でも相談できる信頼関係の構築に力を入れていきたい。生徒同士の関係においても互いを認め合い、自分の個性を安心して表現できるような集団づくりを目指したい。特にいじめを絶対にしらない、させないという気持ちが生徒にしっかりと定着するように、生徒自身が問題意識をもてるような活動を推進する。</p> <p>「学校教育アンケート」のいくつかの生徒回答結果から、生徒の自己評価が教員や保護者よりやや低めであることから、生徒に自信を持たせることが必要と捉えた。今後、行事や生徒会活動、学級活動の中で生徒が自ら考え、判断し、実行するような場を適切に設定し、失敗も重ねながら試行錯誤して成功する経験を積み、自己肯定感を高めさせたい。</p>